

主日礼拝説教「リピーター歓迎！」

日本基督教団石神井教会 2018年11月11日

【旧約聖書日課】創世記 18章1～15節

¹主はマムレの檜の木のでアブラハムに現れた。暑い真昼に、アブラハムは天幕の入り口に座っていた。²目を上げて見ると、三人の人が彼に向かって立っていた。アブラハムはすぐに天幕の入り口から走り出て迎え、地にひれ伏して、³言った。

「お客様、よろしければ、どうか、僕のもとを通り過ぎないでください。⁴水を少々持って来させますから、足を洗って、木陰でどうぞひと休みなさってください。⁵何か召し上がるものを調べますので、疲れをいやしてから、お出かけください。せっかく、僕の所の近くをお通りになったのですから。」

その人たちは言った。「では、お言葉どおりにしましょう。」

⁶アブラハムは急いで天幕に戻り、サラのところに来て言った。「早く、上等の小麦粉を三セアほどこねて、パン菓子をこしらえなさい。」

⁷アブラハムは牛の群れのところへ走って行き、柔らかくておいしそうな子牛を選び、召し使いに渡し、急いで料理させた。⁸アブラハムは、凝乳、乳、出来立ての子牛の料理などを運び、彼らの前に並べた。そして、彼らが木陰で食事をしている間、そばに立って給仕をした。

⁹彼らはアブラハムに尋ねた。「あなたの妻のサラはどこにいますか。」

「はい、天幕の中におります」とアブラハムが答えると、¹⁰彼らの一人が言った。「わたしは来年の今ごろ、必ずここにまた来ますが、そのころには、あなたの妻のサラに男の子が生まれているでしょう。」サラは、すぐ後ろの天幕の入り口で聞いていた。¹¹アブラハムもサラも多くの目を重ねて老人になっており、しかもサラは月のものがとうになくなっていった。¹²サラはひそかに笑った。自分は年をとり、もはや楽しみがあるはずなし、主人も年老いているのに、と思ったのである。

¹³主はアブラハムに言われた。「なぜサラは笑ったのか。なぜ年をとった自分に子供が生まれるはずがないと思ったのだ。¹⁴主に不可能なことがあるろうか。来年の今ごろ、わたしはここに戻ってくる。そのころ、サラには必ず男の子が生まれている。」¹⁵サラは恐ろしくなり、打ち消して言った。「わたしは笑いませんでした。」主は言われた。「いや、あなたは確かに笑った。」

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 9章1～9節

¹わたしはキリストに結ばれた者として真実を語り、偽りは言わない。わたしの良心も聖霊によって証ししていることですが、²わたしには深い悲しみがあり、わたしの心には絶え間ない痛みがあります。³わたし自身、兄弟たち、つまり肉による同胞のためならば、キリストから離され、神から見捨てられた者となってもよいときえ思っています。⁴彼らはイスラエルの民です。神の子としての身分、栄光、契約、律法、礼拝、約束は彼らのものです。⁵先祖たちも彼らのものであり、肉によればキリストも彼らから出られたのです。キリストは、万物の上におられる、永遠にほめたたえられる神、アーメン。

⁶ところで、神の言葉は決して効力を失ったわけではありません。イスラエルから出た者が皆、イスラエル人ということにはならず、⁷また、アブラハムの子孫だからといって、皆がその子供ということにはならない。かえって、「⁸イサクから生まれる者が、あなたの子孫と呼ばれる。」⁹すなわち、肉による子供が神の子供なのではなく、約束に従って生まれる子供が、子孫と見なされるのです。⁹約束の言葉は、「来年の今ごろに、わたしは来る。そして、サラには男の子が生まれる」というものでした。

通り過ぎないで！

日曜日の朝、礼拝当番の奉仕者の中から一人が教会の玄関に立って皆さんをお迎えしてくださっていることを、多くの方はご存知かと思います。その日の奉仕者の中のどなたかが立ってくださるのですが、様子をうかがっていると、一番若い方が立ってくださることが多いようです。ずっと立っていなければいけないとか、季節によっては暑かったり寒かったりということがありますから、健康で元気な方にしていただくのがよい、とご判断くださっているのでしょう。実際、おいでくださる方をお迎えしてご挨拶するだけでなく、エレベータの案内をしてくださったり、初めておいでの方へのご案内をしてくださったり、玄関立ちのご奉仕は、臨機応変に対応することが求められるものであるのは確かです。しかしながら、大切なことは、おいでくださった方を歓迎する姿勢でしょう。

もちろん、神のお招きに応えて礼拝においでになられた方の、御前に進み出ようとする祈りを妨げるようなお迎えの仕方をしてはいけません。「礼拝の前には、無駄なおしゃべりをしたくない」という方もいらっしゃるでしょう。そうだとすると、わたしたちは、それぞれバラバラに礼拝に加わるわけではなく、一つの礼拝に共に加わるように招かれてきたのですから、そこにおいでになられたどのお一人にも、「自分はここにいてよいのだろうか」と居心地の悪い思いを抱いていただくようなことがあってはいけません。礼拝においでの方、殊に初めての方、不慣れな方が、「自分もここに招かれている」「ここにいてよいのだ」と思っただけのようなお迎えの仕方をし、礼拝の時間を過ごしていただくことは、わたしたち教会のメンバーがお互いにいつも意識している必要のあることなのではないでしょうか。

今日の旧約聖書日課（創世記 18 章）は、「信仰の父」とも呼ばれるアブラハムが、自分の住まいである天幕に、近くを通りかかった三人の旅人を迎え入れる場面から始まっていました。アブラハムは、そのとき、暑い真昼であったけれども、自分の住まいである天幕の入口に座っていた、と描かれています。本当は暑い日差しを避けるために、天幕の入口を閉じて中に籠っているか、涼しい木陰にでも身を寄せていた方が良いのに、あえて入り口を開いたままにして、その入り口付近に座って外を見ていた、ということなのでしょう。

つい先日まで教会の向かいで二年近く行われていた工事現場の入口に、暑い日も寒い日も、雨の日も日照りの日も、必ず立たれている警備員の方がいらっしゃいました。ずっと同じ方でしたので、すっかり顔なじみになっていました。あまりに、いつも立っただけだったので、こちらが表に出るのが憚られるような思いになるほどでしたが、工事関係者ではない道行く人たちとも随分親しくなられていたようでした。その様子を見ていて、ずっと気になっていました。日曜日の礼拝後に皆さんを送り出し、次の日曜日にまた皆さんを迎えるまで、一週間、教会で皆さんの留守をあずかっているわたしも牧師は、同じだけのことができていだろうか、と。たくさん、教会の前のおりを行く人たちのことを、どれほど、そのまま通り過ぎさせてしまってきたことか、と。

客人を迎える

アブラハムが、どうして、こんなに熱心に三人の旅人を招き入れ、引き留めたのか、不思議に思います。滅多にないことで、人恋しい思いから、客人として迎えたかったのでしょうか。けれども、旅人が珍しいことであったのならば、アブラハムがわざわざ暑い真昼にまで天幕の入口を開けて、通りかかるのを待ち構えていることはなかったでしょう。そもそも、暑さの厳しい土地では、できるかぎり真昼に外を出歩いたりはしないものです。そのような中で、道行く人を見つけようと待ち構えていたアブラハムも変わり者かもしれませんが、そこに現れたという旅人も、きっと訳ありであったに違いありません。けれども、そのことこそが、この場面の出来事の肝心なところなのではないでしょうか。

教会を訪ねて来られる方の中には、いろいろな事情や思いを持っていらっしゃる人があります。実際に、困りごとのご相談をいただくこともあります。教会や牧師が直接に対応させていただけるようなことは、むしろ少ないのです。お訪ねくださる方もそのことを承知で、心に秘めたことを必ずしも打ち明けることなく、ただ礼拝においでくださる、ということも多いのだらうと思います。もちろん、いつもおいでの皆さんも、それぞれに、心に秘めた思いがおありでしょうし、日々の生活の中で向き合わなければいけない事を抱えていらっしゃるのでしょう。わたしたちの生活の中には、日差しの厳しい中をあえて進まなければいけないときもあれば、激しい風雪が降る日にもどうしても行かなければいけないことがあるのです。そのような者に必要なひとときの休息の機会を、わたしたちは、だれかに与えられることによって、ようやく得ることができる、ということもあるのでしょう。

暑い真昼にさえも、天幕の入口を大きく開いて、そこに座り、迎えるべき人がいないかと目を外に向けていたアブラハム。彼は、暇を持て余して、そうしていたのかもしれませんが、それでも、それは意味のあることでした。何か事情を抱えている三人の旅人を迎えて、ひととき休息をとり、心を開いてもらうのに、アブラハムのしていたことは、無駄ではなかったのです。

ところで、この場面の物語は、少し変わり者のアブラハムが訳ありの旅人を心から歓迎した、その姿勢に学ぼうという教訓で終わるわけではありません。そのようなアブラハムが迎えたのが、実は、神の使いであった、否、神ご自身であった、ということこそ、この物語が続いて語っていることなのです。

アブラハムは、旅人に、「来年の今ごろに、妻のサラに男の子が生まれている」と告げられます。その後、旅人を見送る場面では、アブラハムは、この人たちが神の御使いであり、主ご自身であることに気づいてゆきます。主イエスが教えの中で、「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し…てくれた…。わたしの兄弟であるこの最も小さな者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」（マタイ 25:35~40）と語られたことがありました。アブラハムは、まさに、そのような形で神を迎えていた、ということなのでしょう。

来年の今ごろ、約束の子を迎える

来週、わたしたちの教会は、「オープンチャーチ」をいたします。普段、教会においでになることの少ない方に足を運んでいただく機会になればと思っています。けれども、この「オープンチャーチ」という営みは、本当は、わたしたち自身のためのものでこそあるのでしょうか。アブラハムのように通りすがりの人を客人として迎え入れたとき、わたしたちは、神をお迎えすることになるのです。後になって、その客人との出会いが神との出会いであったことに気づかされるようになるのです。アブラハムは、天幕の中に籠って、目を閉じて、祈っていたのではありませんでした。天幕の入口を大きく開いて、その入り口から外に目を向けて、天幕の外の道を行く人に心を留め、客人として迎え入れたのです。神は、真昼の客人として、アブラハムと出会ってくださったのです。

「お客さまは神さまです」と、わたしたちも言うべきでしょう。俗な意味ではなく、聖書に基づいた教会の姿勢として、わたしたちの信仰の態度として、そう言うのです。「わたしたちがお迎えした客人の中に、神はおいでくださっている」。だからこそ、わたしたちは、「オープンチャーチ」を行うのです。

実際、昨年、一昨年の「オープンチャーチ」においでくださったことがきっかけで、今、わたしたちの祈りの仲間に加わってくださっている方が幾人かいらっしゃいます。アブラハムの天幕に迎えられた三人の客人は、「わたしは来年の今ごろ、必ずここにまた来ます」と二度も繰り返し言い残して行きました。もちろん、そういう方は限られているでしょう。けれども、先日も、昨年の「オープンチャーチ」においでくださったという方が教会をお訪ねくださって、今年のチラシをお持ちくださいました。「オープンチャーチ」に限りませんが、一年に一度の機会に教会においでくださるという方は、案外いらっしゃるものです。そうだととしても、わたしたちは、分りやすい結果、伝道の効果というような物差しで判断してはいけないのかもしれませんが。

アブラハムが来年の再来を約束されて送り出した三人の客人は、創世記の物語を読み進めていくと、結局、再び訪ねてくることはなかったのです。せっかく歓待したのに、あの客人たちは二度とアブラハムの天幕を訪ねてくることはなかった。しかし、その代わりに、一つのことが起こりました。「そのころには、あなたの妻のサラに男の子が生まれているでしょう」という約束が実現したのです。

使徒書日課（ローマ 9 章）でパウロは、「これは、神の約束に従って生まれる子のことだ」と説明しました。アブラハムの三人の客人たちが残したものは、「神の約束の子」の誕生です。客人は、生まれた子とは何の関係もありませんでした。しかし、客人を迎えたことこそが、生まれた子を「神の子」として迎え入れることに、そして、アブラハムの家が神のおいでくださる家になることに、つながったのです。

アブラハムの妻サラは、夫がしたこと、夫と客人が交わした会話を、ひそかに笑いました。冷たい笑い、軽蔑の笑いです。けれども、その笑いは、いずれ喜びの笑いになるでしょう。わたしたちの笑いも、喜びの笑いになるのです。

